

〔段注説文解字<sup>七上</sup>〕縹麥莖也、麥莖光澤媚好故曰縹、一作藹、从禾肩聲、十四部、

〔和漢三才圖會<sup>百三</sup>〕稍音和名牟岐加良 俗云麥稔

按稍麥莖也、大小麥共中空、白色光澤、有薄籜而裹節、小麥稍厚、硬用可葺屋、亞萱葭稈等、

陳大麥稍、煎濃汁服治小便不通、頻服、

〔源平盛衰記<sup>二十六</sup>〕祇園女御事

忠盛馬ヨリ飛下、太刀ヲバ捨テ、得タリヤオフトゾ懷タル、手捕ニトラレテ、御悞候ナト云音ヲ聞

バ人也、己ハ何者ゾト問エバ、是ハ當社ノ承仕法師ニテ侍ガ、御幸ナラセ給ノ由承候間、社頭ニ御

燈進セントテ參也ト答、續松ヲ出シテ見レバ、實ニ七十計ノ法師也、雨降ケレバ、頭ニハ小麥ノ莖

ヲ戴、右ノ手ニ、小瓶ヲ持テ、左ノ手ニ土器ニ煨ヲ入テ持テ、煨ヲケサジト吹時ハサト光、光時ハ小

麥ノ莖ガ耀合テ、銀ノ針ノ如クニ見エケル也、事ノ様一々ニ顯テ、サシモ懼恐レツル心ニ、イツノ

間ニカ替ケン、今ハ皆咲ツボノ會也ケリ、

〔武江年表<sup>五</sup>〕寛延二年己巳八月、雜司谷鬼子母神境内に、孝女くめといふもの、麥莖にて作たる角

兵衛獅子を賣り始め、

〔嬉遊笑覽<sup>六下</sup>〕六下麥わらの蛇、并唐團扇、江戸砂子駒込富士權現祭日、當所の産唐團扇、麥わらの蛇、五

色網、夏の果物と見えたり、六玉川<sup>六</sup>、江戸は蛇が出てあつい朔日、江戸二色にも、その畫あり、狂歌

にや、水無月のついたつ市の賣ものは外にたぐひのあらぬうちにはぢや、江戸塵拾、駒ごみ不二祭

麥わらの蛇は、寶永のころ、此處の百姓喜八と云もの、ふと案じ付て、これを作りて賣といへり、淺草

の不二權現にて、此蛇を賣は近きこと、みゆ、江戸近在を二月頃あるきてみれば、田のくろに竹など立て、藁盒子にこ

の蛇のごとく、稻稈にて編たるものを結付たり、おもふに初午稻荷祭に、わら合子作りて、供物を

入るなるべし、その合子の編かた、この蛇の口の如し、次でに蛇を作りゆひ付るは、蛇を避る呪ひ